

# 「患者の語りデータベース」を活用した 薬学生へのコミュニケーション教育の試み

井手口直子 高木 彰子

Naoko Ideguchi Akiko Takagi

---

## Study of Communication Training for Pharmacy Students Using Database of Patient Stories

---

キーワード：コミュニケーション教育、薬学生、DIPEX、患者の語り

---

「患者の気持ちを理解する」ことを目的とし、薬学2年生にDIPEX\_Japan のサイトにアップされている20歳代の乳がん患者の語りを共覧する授業を行った。感想をグループで共有した後、その患者に向かって手紙を書かせた。翌週の授業でクラスメイトの書いた手紙をまわし読み、感想を共有した後に、将来医療従事者として患者とどのようなかかわりをするか考へさせた。授業後のアンケートで患者の語りを供覧し感じたことを尋ねたところ、「話し手の気持ちが伝わってきた」と回答した学生が96%、「真剣に集中して見てしまった」が88%、「他人ごとではないと思った」、「何かしてあげたい気持ちになった」がそれぞれ85%、「みている自分もつらくなった」84%、との回答が得られた。また、データベースで語っている患者へ手紙を書く時に心がけたこととして最も多かった回答は、「自分の正直な気持ちを伝えることを重視した」の68%であり、次いで「読んだ相手の気持ちが軽くなるように心がけた」34%であった。

---

Keyword; Pharmacy student, communication training, DIPEX, Patient stories

---

Two-hundred and twenty one second year pharmacy students took a class showing the stories of breast cancer patients in their twenties, which are available on the DIPEX\_Japan website, in order to understand patients' feelings. After sharing their impressions in groups, the students had to write letters to the patients. The letters written by the students were passed around among classmates in the following class, and after sharing their impressions, the students were asked to think about what involvement they should have with patients as future healthcare workers. When asked about their feelings after being presented with patient experiences, the following responses were obtained via questionnaire after the class: 96% felt that "the speakers' feelings really came across"; 88% said "I was completely drawn in"; 85% responded with "I didn't feel any separation from the speakers" and "I felt that I wanted to do something"; and 84% felt "it was tough to watch". Furthermore, the most common responses regarding what students were conscious of when writing to the patients that shared their experiences on the website were, 68% felt "it was important to convey my true feelings", followed by 34% who said "I tried to make the person who read my letter feel better".

---

Faculty of Pharmaceutical Sciences Teikyo Heisei University

---

## 1. 緒言

薬学教育コアカリキュラムAのヒューマニズムは“全学年を通して学ぶ”とされている。学生が実務実習先の医療現場で患者に接する前に「患者の気持ちに配慮する」ために学内で行える方略として、薬害患者の講演、患者の闘病記を読む<sup>1)</sup>、模擬患者（Simulated Patient）との面接セッション等が行われてきた。今回薬学2年生を対象とし、「患者の語り」を共覧し感じたことを話し合い、さら

にその患者に手紙を書くというプロセスを通して、患者の気持ちを考えるという医療従事者に必要な素養の醸成を目的とした。

DIPExとはDatabase of Individual Patient Experiencesの略であり、英国オックスフォード大学で作られている「患者の語り」のデータベースである。2009年12月 日本の特設非営利行政法人「ディベックスジャパン：健康と病の語りデータベース」<http://www.dipex-j.org/>（代表 別府宏暁）は日本人の乳癌と前

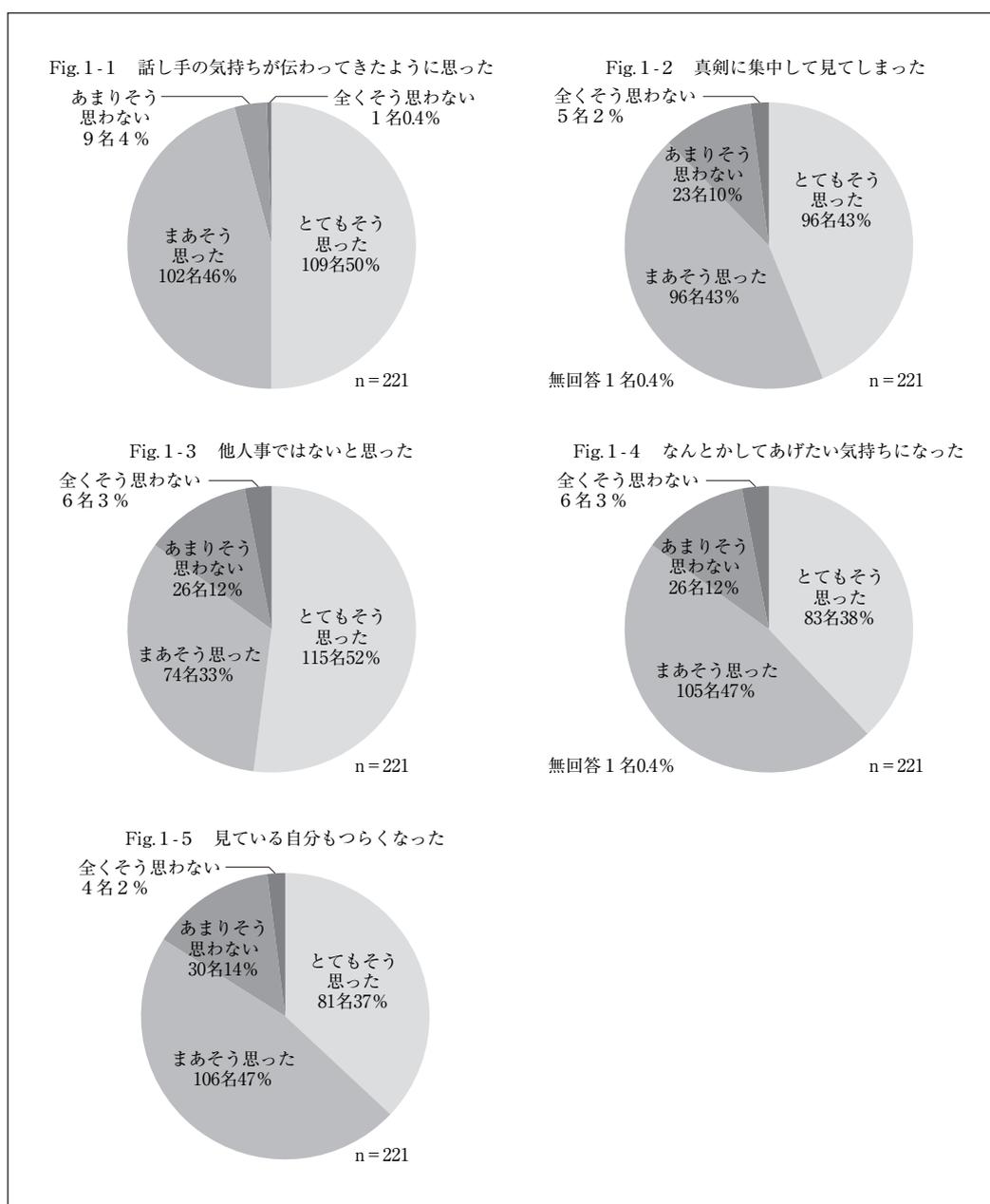


Fig. 1 患者の語りを見ているとき、どのような気持ちになったか

立腺癌の患者の語りを公開した。「健康と病いの語り」データベースは、病気の診断を受けた人やその家族が、同じような経験をした人たちの「語り」に触れて、病気と向き合う勇気と知恵を身につけるために作られたウェブサイトであり。診断時の思いや治療法の選択、副作用の経験などが、映像や音声、テキストを通じて語られたものである<sup>2) 3)</sup>。

本論文では、「患者の語り」にふれた学生が何を感じ、患者に何を伝えようとするか、そして他者が書いた手紙を読むことで感じたことを踏まえ、医療従事者としてどうあるべきと考えたかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

薬学2年生のコミュニケーションの授業で1コマ×2週間（計180分間）で行った。学生のグループは男女がほぼ同数かつ1グループの人数が7-8名になるようにランダムに構成した。2コマの授業プログラムは以下の通りである。

### [1コマ目]

1. グループで患者の気持ちを分かるためにはどうしたらいいか話し合い、記録
2. DIPEX\_Japan「乳がんの患者の語り」を共覧
3. グループで感じたことを話し合い、記録
4. 「患者の語り」で話していた患者に薬学生として（あるいは一個人として）手紙を書き、提出

#ディスカッション記録は当日、手紙は提出期間を授業日から4日間とした。

### [2コマ目（1週間後）]

1. 各グループに別のグループの学生が書いた手紙のコピーをランダムに配布
2. グループ内で輪読
3. 手紙を読んだの感想を話し合い、記録
4. 最も心に響いた手紙をグループ内で選出

5. 2コマの授業を通して将来薬剤師としてどのような心がけで患者さんに接しようと思うか、話し合い、記録
6. 終了時アンケート及びディスカッション記録を提出

### 終了時のアンケート内容

1. 患者の語りをどのように見ていたか
2. 手紙を書く時、どのような気持ちで書いたか？
3. 将来薬剤師としてどのような心がけで患者さんに接しようとするか？

共覧した「患者の語り」はDIPEX\_Japan「乳がん患者の語り」の中から、学生に年齢が近い20歳代の患者のものを選び、その患者の語りをデータベースで公開している11のクリップをすべて共覧した。

1コマ目に記名で提出された手紙は全てナンバリングしてコピーした後に原本は保存、コピーは個人情報部分を切り取り、2コマめにグループの人数に合わせてランダムに分け、封筒に入れて授業開始時に各グループに配布し、授業終了時にすべて回収した。

### 分析方法

選択肢がある問いは集計。自由記述及びディスカッション内容の記述は意味内容の類似性に従って、記述内容を抽象化した表現でカテゴリー化した。

### 倫理的配慮

ディスカッション内容の記録は個人の発言が特定できない記録形態とした。また終了時のアンケートは別紙とし完全無記名とした。手紙については、次の授業時に個人情報部分を切り取って他者が読むことを予告してから書かせた。またその後も不都合があれば申し出るように告知したところ、1名が文面で自分が特定できると思うと申し出たので、その手紙を配布対象から除いた。また教員がすべ

Table 1 患者の語りを見ての感想ディスカッションの記録分類

<p><b>1. 「語った患者への思い」</b></p> <p><b>①共感的思考</b></p> <p><b>治療や病気に取り組む患者への共感 (10)</b>          ・副作用が現れて恐ろしかったのではないかと思った。等</p> <p><b>生活の困難さへの共感 (8)</b>          ・就職できないなど治療後も大変。 ・社会復帰が思っていたより大変だなと思った。 等</p> <p><b>周りの無理解による苦しさへの共感 (4)</b>          ・みんなの目が「がん患者」に対する理解がないこと、それが一番辛いと思う。 等</p> <p><b>女性としてのつらさへの共感 (3)</b>          ・女性として、人の目に見える部分に副作用が出るのはつらいことだと思う。等</p> <p><b>体験を通しての共感 (2)</b> ・自分にも似た経験があるので少しわかる気がした。等</p> <p><b>②評価的思考</b></p> <p><b>患者の前向きな姿勢への称賛 (3)</b>          ・治療に前向きに取り組んでいてもポジティブですごいと思った。 等</p> <p><b>③同情的思考 (9)</b> かわいそう等</p> <p><b>2. 自分個人への内省</b></p> <p><b>他人事ではない (17)</b> ・年が近かったので、他人ごととは思えない。等</p> <p><b>患者の思いを理解することのむずかしさ (3)</b>          ・自分もビデオの中の「友達」のような感じになってしまうかもしれないと思った。等</p> <p><b>相手への配慮 (3)</b> ・「もう治った？」と軽はずみに聞く事はよくないことなのだと感じた。等</p> <p><b>自身の「健康」への再認識 (2)</b>          ・がんになったら、とても辛いんだろうなということ、健康でいられる分、自分は幸せなのかなと思った。</p> <p><b>患者の話聞く事の重要性 (4)</b>          ・患者の話聞いてみないと分からないことはまだまだあると思う。等</p> <p><b>学習意欲 (4)</b> ・もっと学ばねばと思った</p> <p><b>自己の周囲への思い (5)</b> ・もし身内が乳がんになったら支えたい 等</p> <p><b>ショック (3)</b> ・ブルーになった 等</p> <p><b>3. 患者の周囲への思い</b></p> <p><b>周囲の人のサポートの必要性の訴え (13)</b>          ・患者さんがすごく辛そうであったことから、周囲のサポートが必要だと思った。 等</p> <p><b>患者へのケア意識の高まり (7)</b>          ・物理的な治療だけでなく、患者さんとの精神的な関わりも大切だと感じた。等</p> <p><b>社会の無理解への驚き (9)</b>          ・がんに対する社会の認知の少なさ。 ・社会の壁。病院内の安心感との格差。等</p> <p><b>患者の周りの人への非難 (9)</b>          ・病気になったからって(周囲が)態度を変えなくてもよいのでは？ 等</p> <p><b>医療従事者の対応への非難 (3)</b>          ・医療者の対応がひどいと思う。一般の患者さんにはもっと細やかな説明が必要だと思う。等</p> <p><b>4. 客観的視点</b></p> <p><b>病気への新認識 (25)</b> ・乳がんの病気の重さや若くてもなることを知った。 等</p> <p><b>治療や副作用の厳しさへの驚き (20)</b>          ・抗がん剤治療が思っていたよりも辛いものだと感じた。 等</p>
--

ての手紙を読み、本人からの申し出がなくとも文面で個人が特定できる内容が含まれていると判断した手紙も配布対象から除外した。

最終アンケート回答者は221名、男性108名(49%)、女性113名(51%)であった。

### 3. 結果

1 コマ目の出席者数は 235名、2 コマ目に出席者数は221名。

1) 患者の語りをどのように見ていたか？  
 選択肢を用意し、「とてもそう思った」、「まあそう思った」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」で回答する形をとった

96%の学生が「患者の気持ちが（まあ）伝わってきたように思えた」と回答し（Fig.1-1）、86%の学生が「（まあ）真剣に集中して見た」と回答した（Fig.1-2）。また、患者の語りを見たことでの影響として、85%が「（まあ）他人事ではないと思った」（Fig.1-3）、85%が「（まあ）なんとかしてあげたいと思った」（Fig.1-4）と回答した。同時に84%の学生が「見ている自分も（まあ）つらくなった」（Fig.1-5）と回答し、「患者の語り」を視聴することは、多くの学生にインパクトを与えたと考えられた。

## 2) 「患者の語り」を見てどのような感想もったか

グループディスカッションによる自由記述記録を内容の類似性でカテゴリー化を行ない命名した（Table 1）

学生の感想を視点の位置でサブカテゴリーからさらにカテゴリー化した。「語った患者への思い」は、患者が治療に取りくむ姿勢や困難に苦しむ感情への共感的思考と、患者の姿勢を“すごい”と評価する評価的思考、そして「かわいそう」という同情的思考の感想がみられた。「学生自分自身への思い」とし

ては、他人事ではないという危機感、相手へ配慮し、理解することのむずかしさを感じたもの、もっと学ばなくてはという学習意欲等が見られた。そして「患者の周囲への思い」として患者周囲の人間の無神経さや社会の無理解への驚きと怒り、周囲のサポートの大切さの訴えがあった。最後に乳がんの病気についての知識や新しい認識を得た、治療や副作用も厳しいものだという「客観的な視点」が見られた。

## 3) 手紙を書く時、どのような気持ちで書いたか。

選択肢を用意し、複数回答可としたところ Fig.2 のような結果が得られた。

“自分の正直な気持ちを伝えることを重視した”と回答した学生が151名、約68%と最も多かった。ついで“読んだ相手の気持ちが軽くなるような文章を心がけた”、“病気がよくなって欲しいという気持ちを伝えようとした”、“相手に少しでも寄り添いたいという思いで書いた”がそれぞれ約30%強であった。

“その他”に記載された内容として、相手が傷つかない言葉遣いを心がけた。

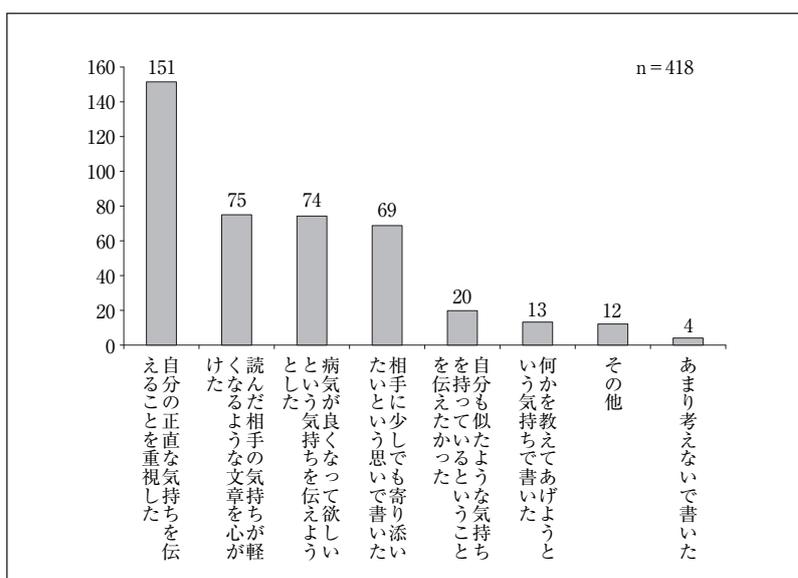


Fig.2 手紙を書く時、どのような気持ちで書いたか？

Table 2 同級生が書いた手紙を輪読しての感想 ディスカッション記録まとめ

<p><b>①手紙そのものへの評価</b></p> <p><b>手紙を書くことへの肯定 (4)</b> もし自分が手紙をもらう立場だったら励みになると思う 等</p> <p><b>手紙の内容への肯定 (43)</b> 自分が影響されたことを書いてあるのが良かった これから自分が何ができるかを伝えていてよかった 手紙の相手が傷つかないように配慮されている手紙がほとんどでいいことだと思った 等</p> <p><b>②手紙を書く姿勢への評価</b></p> <p><b>専門的立ち位置への肯定 (11)</b> 医療従事者の視点で患者を支えることをみな考えていた 薬学生としてやるべきことを考えていてすごいと思った 等</p> <p><b>共感的な文章への評価 (29)</b> 病気になった人の気持ちを必死に理解しようとしていたのが伝わってきた がん患者さんを尊敬しているという手紙があって、とても感動した 等</p> <p><b>「がんばって」という表現への感じ方 (4)</b> がんばってという言葉は頑張っていない人という言葉だと思う 前向きに頑張ってくださいとかありきたりな言葉でも励みになるのではないか 等</p> <p><b>批判 (16)</b> まだまだみな他人ごとだと思った 等</p> <p><b>③自分自身へのふりかえり</b></p> <p><b>読めて参考(勉強)になった (16)</b> 皆の意見が聞けて参考になった・知らなかったことがあったと気付いた 等</p> <p><b>自分もこう書けばよかった (3)</b> 医療従事者になる立場からもかけば良かった、励ましのメッセージをかければよかった 等</p> <p><b>映像をみて感じた事の再確認 (20)</b> 実際に患者さんの声をきかないと、その病気について理解することはできない 自分は男だけど女性の視線で患者を支えられる薬剤師になりたいと思った 等</p> <p><b>手紙内容への共感 (5)</b> 自分もそうだった</p> <p><b>④複数読むことでの所感</b></p> <p><b>皆知らないのだな (10)</b> がんについてちゃんと知っている人が少ない、がんという病気の重大さにみな驚いていた がんについて実感のない人が多いと思った 等</p> <p><b>皆違うのだな (20)</b> 同じような感じもしたけれどこまかいところで意見が違う 同じものを見ていても人によって考えることは違うのだと思った 等</p> <p><b>⑤文章内容の客観的観察 (20)</b> 身内のことを話したり、詩のように書いて利して励まし方が個性的な書き方をしている人がいた 長い手紙の人は応援するようなしっかりした手紙が多い 等</p>
--

軽く考えないよう心がけた。  
貴重な体験を話してくれた感謝の気持ちで書いた。

その人の周囲の人たちに何故理解しないのかという疑問と怒りの気持ちで書いた。

やたらな事を簡単に言えないなと思って何

を書いていいかわからなかった。  
などがあった。

4) 同級生が書いた手紙を読んでの感想

授業2コマ目に同級生の手紙のコピーを匿名、ランダム化し、各グループに配布し輪読

させ、感想を話しあった。その記録内容をまとめるとTable 2のようになった。

同級生が書いた手紙を輪読していくつかの視点からの感想があった。手紙を書くという行為そのものへの肯定と、手紙の内容を肯定評価する視点。患者の立場に立つなど、書き手の姿勢を評価する視点。同級生の手紙を読むことで“勉強になった”、“こういう風に書けば良かった”等自己への振り返りの視点。“皆もがんのことは良く知らないのだな”等の同感の視点。そして単に「・・・が書いてあった」といった客観的な観察の視点であった。

#### 5) その手紙が選ばれた理由

各グループで輪読した手紙の中で、メンバーの心に最も響いた手紙を選出させ、理由を話し合わせた。なぜその手紙が良いと思ったのか理由を分類するとTable 3のように、「相手の立場に立っているから」、「医療従事者として支援している」、「(書いた本人や身内の) 体験があるから」、「正直で誠意がある」、「自分ができていることが書いてある」となった。

#### 6) 将来薬剤師としてどのような心がけで、患者さんに接しようと思うか

グループディスカッションの記録をカテゴリー化し名前をつけた。158名(71%)もの回答が、「相手に共感する、よりそうこと」であった。次に27名分(16%)は、「病気や薬についての理解、知識を高めること」であった。その他、「自己開示と自己責任」、「多様な患者への理解」、「医療や社会に貢献すること」が挙げられた。

## 4. 考 察

薬学コアカリキュラムA、ヒューマニズムにおける「患者の気持ちに配慮する」教育を、学内で行うために、約220名の薬学2年生が「患者の語り」を供覧した。そこで感じ取るものをグループディスカッションで共有

し、手紙という形で表現させ、さらにそれを読んで感じたことを話し合った。医療系学生への闘病記を用いた教育は、特に看護分野で以前より行われている<sup>4), 5), 6), 7)</sup>。たとえば、患者の手記を読むことにより対象理解の深まり、学習の再認識、看護行為への転換が見られることが判っている<sup>7)</sup>。また、臨床実習で担当する患者に向き合うとき、同じ疾患について語られた闘病記から学ぼうとすることは、個人差があってもとても大きな意味を持つと見られている<sup>5)</sup>。一方薬学教育では1年生の導入実習で闘病記を課題として読み、グループディスカッションを行うことで男女ともに70%弱の学生が医療への「関心がとても高まった」と回答し、同じく約7割の学生が「患者心理の理解がとても深まった」という研究がある<sup>1)</sup>。今回の分析では、学生個々が「患者の語り」に対してどのような立ち位置で、どのような視点で感じていたかそして他者の感じ方を手紙という形で読んで思ったことを意識化することを重要視した。また、闘病記を読むということと、患者の語りを見ることの違いについても考察した。

闘病記を扱う場合、通常学生は授業の前に事前課題として読むことになるが、学生ごとに読書への時間のかけ方や何度も繰り返し読む、といった、資材への触れかたの違いが発生する。しかし今回の「患者の語り」は同一時間に一斉に共覧しており、短い時間の中で学生個々の思考の枠組みによる感じ方の違いといったことがより明らかになるのではないかと考えた。また、「患者体験」「病の体験」の記録として、書き言葉で記録された闘病記や闘病ブログと違い、「語り」は話し言葉であるというだけでなく語り手の声や姿といった、身体性を伴ったデータである<sup>3)</sup>ことから、学生はよりリアリティを感じるのではないかと考えた。今回用いたDIPEX\_Japanの「患者の語り」は1クリップが長くても5分ほど、短いクリップは1分程度のものもあ

Table 3 良い手紙の理由 学生の評価

<p><b>相手の立場に立っている</b>                  相手の立場に立っていて心にしみた                  親身に相手の痛みを共感しようとしている                  患者さんが傷つかない文章になっている                  患者さんに対して少しでも気持ちを理解したいということが伝わってきた 等</p> <p><b>医療従事者として支援している</b>                  他の手紙には「同情」が多いが、この手紙は「応援」医療に携わる人の意見もありよい                  等</p> <p><b>体験があるから（自分や身内）</b>                  身内が乳がんであるという体験を基に書いているので、一番気持ちが分かると思った。                  自分が病気にかかっているという立場で共感している。 等</p> <p><b>正直で誠意がある</b>                  きちんとした知識を持った誠意ある手紙だったので、気持ちが伝わりやすいと思った。                  相手の幸せを願い、気持ちを理解しようとしながら自分の思いや考えを正直に伝えていた                  表情をみるなど細かいところまできにかけていて、頑張ってください以外のことを書いて                  あった                  「医療人になろうと勉強しているのに相手の立場に立てない」という部分が皆の目標と一                  致していて共感できた                  自分が相手の立場だったら読みやすい、おしつけがましくない                  無理に励ましている感じがなくてよかった 等</p> <p><b>自分ができることが書いてある</b>                  自分にできることを前向きに考えていてよかった                  これから自分がどうすればよいのかとか患者さんを励ます言葉がある。                  話を聞いた経験を役立てようとしたところ 等</p>
---

る。同一の患者の語りでも、クリップごとに名前がつけられ、テーマは様々で、同一の患者のクリップを連続して視聴しても、ぶつり、ぶつりと話題が飛ぶ印象がある。闘病記のように書き手のペースでひとつのストーリーが流れていくのとは違う。坪倉（2003）は情報の記述の仕方にはプロット的な並べ方と、ストーリー的な情報の記述の二つがあり、学習者の心情にふれ、全体構造もわかり、興味・関心と呼ぶのは後者であるとしている<sup>8), 9)</sup>。しかしそもそも「患者の語り」の特徴はデータベースとなっている点である。「患者の語り」を作成したDIPExの活動目的は二つあり、一つは保険医療サービスの利用者の支援、もうひとつは医療者の当事者理解を深めるための支援である<sup>3)</sup>。佐藤（2009）は、医療はそもそも不確実性の上にあるといえるが、患者の不安は医療そのものの不確実性ではなく、個別の医療者あるいは医療機関

の技術が必要な基準に達していないのではないかと、という疑念に発していることが多い。医師の技術さえしっかりしていれば、必ず不調の原因は特定することができ、特定された原因に対して必ず治療法があるという思い込みがあるように思われるという<sup>2)</sup>。DIPExの語りはデータベースであり、閲覧者が自分の気になっている治療法や薬物療法、生活のことなど、テーマ別に複数の患者のその部分だけの語りを見ることができるのが特徴である。

#### 「患者の語り」ビデオクリップの視聴から手紙を書くことでの視線の変化

今回の授業において薬学生が語りのクリップを視聴した感想をグループ内で話す時と、さらにその患者へ手紙を書くという時に、学生の視線やスタンスはどのように変化したのであろうか。看護分野の研究では闘病記を読

Table 4 将来薬剤師としてどのような心がけで、患者さんに接しようと思うか

<p><b>相手に共感する (158)</b>          相手の気持ち(立場)を親身になって考えて接しようと思った、寄り添う          相手の気持ちを少しでも軽くして上げられるよう          正直新しい薬を作ろうとは思わないが、それを使用している患者さんの気持ちを感じてみようと思った</p> <p><b>知識をつけて病気を理解する (27)</b>          病気を知り理解することが大切、副作用やアレルギーの知識</p> <p><b>信頼してもらえるように (24)</b>          患者さんの些細なことでも気づけるようになりたい、気軽に質問してもらえるよう          厚い信頼をもたれるように心がける          明るく元気に接して仲良くなれるようになりたい</p> <p><b>自己開示・自己責任 (13)</b>          自分の正直な気持ちも伝えられるようになりたい          一個人として接することができる薬剤師になれたらと思う          自分の言動で相手を傷つけてしまうことがあるので、一言一言責任を持って接しようと思った          気持ちを十分に理解することはとても重要なことだと思う。気持ちを理解するのではなく、感情移入してしまうことに気をつけたい。</p> <p><b>多様性の受容 (4)</b>          様々な病気の体験談を聞き、患者さんの気持ちをもっと知りたい          同じ病気だとしても人それぞれ感じ方は全く異なっていると思えたので、先入観にとらわれずに患者さんに接するべきだと思った</p> <p><b>医療貢献 (6)</b>          医者と患者の架け橋であること。          患者さんが治療を真剣に受けてくれるように接したい</p> <p><b>社会貢献 (2)</b>          病気についてもっと一般の人にも理解してもらって、病気で辛い思いをしている人が住みやすい社会をつくっていききたい          少しでも飲みやすい薬をつくって、楽になってもらいたいと感じた</p>
---

むことで学生の感想はおおまかに3つのタイプに分けられ、まず看護職という将来の自分の職業と結び付けて考えたもの、(中略)次に「死を身近に考えることは、よりよく生きることにつながる」と闘病記の著者に自己を重ね合わせたことで、自らの生き方を見つめなおす機会になったというもの、さらには「病気に向き合うなかで患者自身が生と死に対する意味を模索していく姿に共感を得た」(中略)など闘病記の著者への共感を述べたものが見られた<sup>6)</sup>、今回対象の薬学生も、クリップを視聴したときは“薬剤師としてもっと知識をつけ患者ケアをしたい”という自分の将来の職業に結び付けて考えたもの、“他人ごとではないから自分の健康も気をつけた

い”という語り手に自己を重ね合わせたもの、そして“患者の生き方や姿勢を支援する”共感的な立ち位置が見られ、闘病記を読んだ看護学生との共通点が見られた。一方、今回の薬学生が語り手に対して手紙を書く時に最も多かったのが“自分の正直な気持ちを伝えることを重視した”であり、次に“相手の気持ちが少しでも軽くなることを心がけた”であった。自分の感想を仲間うちのグループで述べるのと当の患者に何か発信する手紙では、学生の立ち位置は異なるのではないか。原田(2003)らは一般の人々による日常的な相談、援助場面の会話に注目し、“人はどのように他者の悩みを聞くのか”という研究において、1 “悩みの話し手の言葉を受

容的に受け止め、必要な情報について尋ね、自分が理解した事を伝え返す”、2 “悩みの話し手の見方を変えようとしたり、問題解決のための行動を促す” 個人的な意見、3 “自分自身の体験や周囲の人の事情などを語る” 相手の悩みを自分に引き付けて考える。4 “悩みの話し手の問題受容を促す、悩みの直接的な解決を目指さず、励ましの言葉をかけるにとどまる。” があるとし、うち3と4は臨床心理士などの面接や、カウンセリングの技法とは異なる日常的な相談援助の在り方であるとしている。<sup>10)</sup> 手紙は相談とちがい一方通行であるが、今回の手紙には上記の2にあたる個人的な意見や、3にあたる自分や身内等の病気の体験を書いたものがあつた。そして4にあたる励ましの言葉が目立った。これは学生が語りの患者に対し、自分が相談されたように感じた真剣さの表れともいえると考えられた。

#### グループ内での感じ方の違い

同級生の書いた手紙を輪読し、感想を共有しさらに評価する時に、グループの中でもその感じ方は様々であつた。たとえば同じ手紙を読んだグループ内の感想でも、“乳がんがこんなに思い病気だとは思わなかつたと多くの人が書いていた。きちんと認識できたので良かったのではないかと思う” “患者さんのことを気遣ってあげられる手紙が多くてよかった。やさしい人が多い” という感想もあれば、“手紙を読んで頑張ってくださいとか、そういう励ましの内容だったけど、なにか他人ごとのような手紙が多かつたと思った” と評価が大きく異なる感想があつた。

#### 「がんばって」という表現への感じ方の違い

今回学生が語り手の患者に向けて書いた手紙の中には、“がんばってください” という表現が頻回見られた。同級生の書いた手紙を輪読した感想にそのことに触れているものが

複数あつた。“頑張ってください、負けないでください、勉強になりましたなどの感想が多かつたけれど、自分は個人として見ていたが、他の人は多数でみていたのだと思った”、“がんばってという言葉は頑張っていない人という言葉だと思う”、“前向きに頑張ってくださいとかありきたりな言葉でも励みになるのではないか”、“実際に大きな病気にかかつていないから、がんばってなどありきたりのことしか書けない” と「がんばって」という普段仲間同士の会話では安易に使用する語句の使い方へも敏感になる議論がみられた。

#### 終わりに

がん患者の語りを視聴する機会に、学生は語りを真剣に視聴し、まだ十分に学んでいなかったがんという病気が患者へ及ぼす身体的、社会的影響を初めて知つた衝撃と、がんと闘う患者へむけた個々の様々な思いが同時に沸き起つた。患者へ手紙を書く段には自分の正直な思いを伝えることが先にたつたようであつたが、同級生の手紙を輪読し、その評価をすることでさらに今後の自分の立ち位置について、患者へ共感し寄り添うことを最も重要視するようになったと考えられた。

#### 【引用文献】

- 1) 土屋明美、興与正栄、渡辺謹三、成井浩二、加藤哲太、横松力: 闘病記を読む一薬学導入教育としての展開 *The Journal of Tokyo University of Pharmacy and Life Science* (13), 69-75, 2010
- 2) SATO Sakuma Rika, WADA Emiko: Using the “Database of Patient Narratives” for Effective Health Communication *Japanese Journal of Science Communication*, 3, 89-100, 2008
- 3) SATO Rika SAKUMA: Passing on patient experiences through audio-visual media Ideals and practices of DIPEX (Database of Personal Experiences of Health and Illness) *Journal of*

*Information Processing and Management* 51  
(5):307-320

- 4) Sachiko Okamoto, Naomi Hasegawa: A Study of Group Work in the Convalescent Nursing-Applying Patient's Diary of Against Illness- *The Bulletin of Saitama Prefectural University* 119-124 2006
- 5) WADA Emiko What will the "Tobyoki Collection" bring to patients and medical professionals? *Journal of Information Processing and Management* 49(9):499-508 2006
- 6) 門林道子、真部昌子、小濱優子：看護学生が闘病記を読む意味について—世人看護論での闘病記を用いた授業、5年間の報告— *Bulletin of Kawasaki City College of Nursing* 14(1), 71-81, 2009-03
- 7) Junko KAKEYA: Nursing Students Learning from Patient's Notes Consideration of effect of education incorporating dialysis patient's notes *Bulletin of The department of Nursing Niimi College* 29 29-35,2009
- 8) 坪倉繁美：ペーパーペイシエントによる教育方法・教育評価、看護教育.:902-909,2003
- 9) 森秀実、福田美和子、村岡宏子：成人看護学急性期事例学習におけるシナリオの検討—学生へのグループインタビューより—東邦大学医学部看護学科紀要 第21号, 26-33, 2007
- 10) Kyoko HARADA: How Do People Counsel Others in Everyday Life? Verbal Categories Developed with a Grounded Theory Approach *Japanese Journal of EDUCATIONAL Psychology*,21,54-64, 2003